リポート　菅平「特別な年」成果と宿題　3面
総合・国際　クルド難民に迫り来る冬　4面
スポーツ　飯田高、2年ぶり花園へ　13・21面
社会　首里城から電気系統設備回収　23面
社説　部品会社統合／比残留日系2世　5面

東信　秋の叙勲
北信　受章者の横顔
中信　長野レインボーが優勝
南信　街にあふれるコスプレ
地域ニュース18・19面

2019年（令和元年）
11月4日
月曜日

台風19号　関連記事
環境相と防衛相が視察　2面
ボランティア奮闘　20面
避難所へ出張検診開始　22面
飯山復興祈るえびす講　23面
台風19号 生活情報　21・地域面

信濃毎日新聞
1873年（明治6年）創刊
発行所
信濃毎日新聞社
長野本社　〒380-8546
長野市南県町　657番地
電話（026）
受付236-3000編集236-3111
販売236-3310広告236-3333
松本本社　〒390-8585
松本市中央　2丁目20番2号
電話（0263）
代表32-1200　報道32-2830
販売32-2850　広告32-2860

©信濃毎日新聞社2019年

未来を育てる人がいる
北野建設

「今できることを」思い一つ

長野の被災者宅 記者もボランティア参加

台風19号によって千曲川の堤防が決壊してから3日で3週間がたった。3連休中日の3日。甚大な浸水被害が出た長野市北部を管轄する市北部災害ボランティアセンターには朝からボランティア登録の人が行列を作った。被災地を支援しようと同市に集まったのはこれまで最多の3578人。記者もその1人として参加した。西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市真備町でボランティア活動した経験から、今回も自分で体験し、現状を伝えたいと考えた。（春日 基弘）

中沢さん宅の床下にたまった泥を除去するボランティア＝3日午後0時2分、長野市津野（梅田拓朗撮影）

初対面「仲間」と連携し泥片付け

「被災された方の気持ちに寄り添った活動を心掛けてください」。男性スタッフが呼び掛けた。受け付けを済ませ5人が1チームに。自己紹介をしてマイクロバスに乗り込み、活動場所を割り振る「津野サテライト」に向かった。

千曲川の堤防決壊で浸水した道路は、車が走ると砂ぼこりが立つ。歩くとかすかに泥のにおいがする。真備町でも復興には相当の時間がかかっており、1カ月後でも多くのボランティアが必要だった。

床上1㍍ほど浸水し、住めなくなった長野市津野の中沢英明さん(56)宅が活動場所になった。既に10人ほどのボランティアや、中沢さんが校長を務める小学校の同僚が床下の泥を取り除く作業を進めていた。

中沢さん宅は、小学生の頃に父親が建て替えた。かつて養蚕で使われた2階部分は、新築を機に子ども部屋に。中沢さんが過ごし、今は次女(14)の部屋だ。

中沢さんが1階の床下の木材をバールで外す。数人が地面に降り、スコップや鍬(くわ)で泥をすくった。記者は泥が入ったバケツや籠を受け取り、一輪車で50㍍ほど離れた泥捨て場と往復した。

「板からくぎが出てます」「このバケツお願いします」。ボランティアはみな初対面だったが、声を掛け合い、連携した。

すぐに、みな全身泥まみれに。泥はとても重い。除去はなかなかはかどらないが、「今できることをやろう」と自分に言い聞かせた。

一緒に作業した市内の佐藤芳美さん(65)はこれまで飯山市や長野市穂保でも活動したという。何回も参加するのは「早く復興してもらいたい」との思いからだという。

足腰や腕もくたくたになり、昼食休憩になった。パート従業員小林久美子さん(40)＝長野市石渡＝があめを配ってくれた。10月31日にもボランティアをした際、看護学生にもらったといい、「今度は自分が」と持参したという。

「いろんな所から来ても同じ目的で集まった仲間」と小林さんは言った。

作業は午後2時半に終了。泥の除去は完全には終わらなかった。「今は家を元通りに直すつもり」と中沢さんは記者に話した。また住めるようになるには、気が遠くなるような状況だが、それでも少しずつでも作業を進めるしかない。繰り返しボランティアに参加している人も多くいるが、まだまだ多くの手が必要だと感じる。

佐久の不明男性 遺体発見

県内犠牲者5人目

三石量正さん

県災害対策本部は3日、佐久市中込の千曲川の中州で、台風19号による災害で行方不明になっていた同市入沢のタクシー運転手、三石量正(かず)さん(68)の遺体を発見したと発表した。付近を捜していた三石さんの親族の関係者が見つけた。県警は解剖して死因を調べる。台風19号に伴う災害による県内の死者は5人となり、行方不明者はいなくなる。

浅間大橋下流の千曲川の中州を調べる捜査員ら＝3日午後5時10分、佐久市

同本部関係者によると3日午後2時半ごろ、三石さんの長女の知人が国道141号浅間大橋から下流20～30㍍にある中州で心肺停止状態の男性を見つけ、110番通報。駆けつけた佐久署員らが同5時46分、流木や砂に埋まった男性を掘り出した。衣服は身に着けていた。搬送先の佐久署で同9時40分に死亡が確認され、歯型から三石さんと判明した。

現場は三石さんの自宅から8㌔ほど北西の千曲川下流域。

三石さんは10月12日午後5時40分ごろ、「土のうをもらいに行ってくるか」と言い残し、軽トラックで近くの小学校へ向かったきり行方不明になった。県警が佐久市から飯山市までの千曲川を捜し、親族らも自主捜索を続けてきた。同31日には佐久市入沢区など四つの区でつくる青沼地区の住民や佐久署員ら約210人で大規模捜索をしていた。

被災中小に最大3000万円

政府 支援策

政府が検討している台風19号の被災地支援で、中小企業の再建に最大3千万円を支給する補助金制度を策定することが3日、分かった。経営体力に乏しい中小の資金繰りを支えることで、地域経済の落ち込みを避けるのが狙い。安倍晋三首相が指示した対策パッケージの柱となる。7日の非常災害対策本部会議でまとめ、8日に閣議決定する。

パッケージには中小企業のほか、農業や交通、防災などの各分野の支援策を盛り込む。農業はリンゴ農家の支援拡充、交通はバスによる鉄道の代替輸送費用補助などを講じる。予算は全体で1千億円規模とみられ、2019年度予備費の5千億円の予備費などから捻出する。

農林水産関連では、台風19号などの長野県を含む38都府県の被害額が3日午前9時時点で1754億円に上っている。江藤拓農相は3日の千葉県佐倉市の会合で、リンゴ被害について「農家にとって大きな問題だ」と語った。冠水したリンゴの植え替えで収入が途絶えることを念頭に、支援策を拡充する考えを示した。

天気

☂ 5%以上　▶ 5%未満

19面に詳しい天気情報

災害ごみ処理 連携強化意欲

環境相と防衛相が長野視察

小泉進次郎環境相と河野太郎防衛相は3日、台風19号で大きな被害が出た長野市を訪れ、避難所や災害ごみの仮置き場を視察した。両氏は災害ごみの処理を巡り、環境省、防衛省の連携が強化されていると説明。河野氏は視察後の記者会見で「環境省、自衛隊、自治体、ボランティアに任せる部分をマニュアル化できる段階になったのではないか」と述べ、両省の平時からの連携強化にも意欲を示した。

災害ごみの仮置き場を視察する（手前右から）河野防衛相と小泉環境相＝3日午後2時34分、長野市豊野町

環境省、防衛省によると、災害廃棄物の処理で両省が協力するのは2016年の熊本地震、昨年の西日本豪雨に続き3回目。長野市東北部では、地域のあちこちにまとめて置かれたごみをボランティアが日中に2カ所の集積場に集約し、夜間に自衛隊が市の仮置き場に搬出する取り組みを実施。清掃事業者や広域的な処理の調整を環境省が担った。今回の連携を関係者は「OneNagano（ワン・ナガノ）」と呼んでいる。

小泉氏は記者会見で両省の連携について「新たなステージに向けていきたい」と発言。ワン・ナガノについては「象徴的な取り組みで、今後の先進事例としてヒントをもらった。今後につなげる検討をしたい」と述べた。

阿部守一知事はこの日、市町村に対する災害廃棄物処理の国の補助率をかさ上げするよう小泉氏に要望。小泉氏は「自治体の負担が大変苦しいという声があるのは承知している」とするにとどめた。

片付ける

倒れたブロック塀を片付けるボランティア＝３日午後１時58分、長野市津野

泥だらけで

全身泥だらけになり、座って休憩するボランティア＝３日午後１時45分、長野市津野

運び出す

災害ごみの運び出しに奔走するボランティアの軽トラック＝３日午後３時９分、長野市赤沼

活動先に向かうボランティアの列＝３日午前10時50分、長野市津野

かき出す

側溝にたまった泥をかき出すボランティアの中学生＝３日午後１時18分、長野市津野

ボランティア（左）に具だくさんの温かいみそ汁を振る舞った市民有志の炊き出し＝3日午後0時35分、長野市穂保

活動終了後、泥だらけの一輪車やスコップなどを高圧洗浄機で洗い流すボランティア＝2日午後3時、長野市穂保

被災地の復興へ奮闘

長野市 3日のボランティア最多3578人

3連休中日の3日、台風19号の被災地の長野市に駆け付けたボランティアは3578人に上り、台風で被害が出て以降、最多となった。県社会福祉協議会によると、前日の2300人から1200人余増え、これまでの最多だった10月20日の3039人も超えた。ボランティアは住宅や農園に入り込んだ泥をかき出し、水没した家具を搬出して汗を流した。県社協は「泥などは雪が降る前に片付けないと大変。平日を含め、今後も力添えを頂きたい」としている。

顔や帽子にも泥を付着させながら活動に集中するボランティア＝3日午後2時42分、長野市津野

感謝の言葉

ボランティアへの感謝の言葉を近くの男性が書き込んだ看板。男性は「一生懸命やってくれるボランティアの人に感謝しかない」＝２日午後１時14分、長野市穂保

台風19号 通過後の防災対応に課題残す

関谷直也・東大准教授に聞く

個別の河川情報 丁寧に伝える姿勢重要

せきや・なおや　1975年、新潟市生まれ。専門は災害情報論。著書に「『災害』の社会心理」など。

【甚大な被害が出た台風19号。気象庁は上陸前の早い段階から警戒を呼び掛けた】上陸前日、気象庁は1958年に千人以上の犠牲者を出した「狩野川台風」に匹敵する恐れがあると表現したが、これが適切だったか気になっている。伊豆をはじめ静岡県や関東の被害が大きそうというイメージにつながり、台風がこれらの地域を通過した後の防災対応に課題を残した。進路を見れば東北に影響が及ぶことはある程度予測できたのに、メディアも含めて情報発信が不十分だったと思う。

気象庁は近年、分かりやすく危険を伝えようと「東海豪雨並み」など過去の災害を例示してきたが、今回のように広域災害の可能性がある場合はイメージの固定化によるマイナス面を考慮すべきだ。防災関係者はともかく、そもそも多くの人は60年以上前の台風を知らない。受け手の了解がない情報で良かったのか、考えないといけない。

台風19号の災害が広域に同時多発したという点は昨年の西日本豪雨と似ている。千曲川や阿武隈川の支川との合流点など過去に災害が起きた地域、もともとリスクを抱えていた地域が多く被災したのも特徴だ。

人的被害は急に河川の水位が上昇した地域で多い。暴風の印象が強かった台風15号の残像から、氾濫などに意識が向かなかった面がある。夜間の台風だったことも「屋内にとどまる」という選択につながり、自宅で被災したケースもあった。

【気象庁は今回、13都県に大雨特別警報を出した】大雨特別警報の印象が社会に強すぎるのは問題だ。特別警報が解除されても、時間がずれて生じる河川の氾濫や堤防決壊に注意が必要だったのに意識が向きにくい一因となってしまった。

根本的な問題は河川の情報が伝わっていないことだ。特別警報と避難情報だけが自立ってしまい、本来注目すべき河川が置き去りになっている。技術的には可能なのだから、個別の河川の情報を避難情報と結びつけて丁寧に伝えていく姿勢が重要だ。

大雨・洪水の警戒レベルが導入された今年は「全員避難」という表現が増えたが、妥当かどうか。今回の水害では自宅の2階に上がれば助かったケースが多かったはずだ。平屋やアパートの1階に住むような人を念頭に置いた、より具体的な表現を考えるべきだろう。

当たり前だが、台風は移動する。ということは災害が起きうる地域が移っていくこともある。災害発生に1～2日、社会の警戒が必要なことが台風の特徴で、今回も警戒モードに突入して1日前後経過してから堤防が決壊した地域もある。社会の緊張感が持続するような呼び掛け方も考えないといけないだろう。

被災者の住まい確保への公的支援の基本的な流れ

（浸水被害の場合）

- 住家流出または床上1.8m以上の浸水 ［全壊］ → 応急仮設住宅に入居可能 ［無償］（応急修理費支援は利用不可）
- 床上1m以上1.8m未満の浸水 ［大規模半壊］ 床上で1m未満の浸水 ［半壊］ → 土砂などで住宅として再利用できない／修理のため長期間自宅に住めない → 短期間で最低限の修理をして自宅に戻りたい → 住宅の応急修理費支援 ［上限59万5000円］（仮設住宅は入居不可）
- 半壊に至らないが、住宅の損害割合が10%以上20%未満 → 住宅の応急修理費支援 ［上限30万円］

全壊と大規模半壊は国の被災者生活再建支援制度 ［全壊 最大300万円、大規模半壊 最大250万円］

半壊は県と市町村による「信州被災者生活再建支援制度」 ［（最大50万円）］ を利用可能

全国 行方不明6人に

台風19号の被害は、共同通信の集計で3日までに、死者は13都県89人（災害関連死を含む）、行方不明者は6人に上る。内閣府によると、10月下旬の記録的豪雨の影響もあり、3169人が避難所での生活を余儀なくされている。

総務省消防庁によると、確認された住宅被害は8万棟余り。内訳は全半壊が16都県7534棟、一部損壊が27都道府県7540棟。床上浸水は17都県3万2131棟、床下浸水は20都県3万6149棟。

国土交通省によると、土砂災害は20都県で798件が確認され、堤防の決壊は7県の71河川140カ所。